



試すっ子

学校教育目標「試す人になろう」 No.9

親の涙

校長 中野 主税

かなり前になりますが、ある新聞の朝刊に「折々のうた」という古今の詩歌を取り上げて解説するという大岡信さんのコラムの欄がありました。その中に、

「嘘をいうことをおぼえし子の顔を しみじみながめ泣き居つ妻は」

という歌がありました。この歌は、今から100年以上前によまれたもので、そのころの標準的な日本の家族の様子を表したもののようでした。

この歌からは、母親のわが子を気遣う切ない気持ちが伝わってきます。ちょうど腕白盛りの9歳か10歳くらいの子供が、何か嘘をついたようです。「嘘をつくことはいけない」と何回も何回も言い聞かせても、子供の心には届かず、虚しい気持ちになるということを母親は感じていたのでしょう。「子供の顔をしみじみながめ」ている母親は、お腹を痛めて産んだ我が子が、別の人間になって手の届かないところへ遠のいてしまったような悔しさや切なさで胸がいっぱいになってしまったのです。子供は、母親の涙を見てどのような思いをしていたのでしょうか。



このような状況が生じたときに、今、私たちはわが子にどのように対処しているのでしょうか。親が、わが子を思う心は、時代が変わっても変わらないものだと思いますが、この親のように、わが子の「嘘」と真正面から向き合うことができるのでしょうか。

この解説の中で大岡さんは、「このような歌をよむと、時代の変化を感じずにはいられない。昔はこういう親が日本のどこにでもいたものである。子供の嘘に対する親の厳しい教育もあつ

【ボランティアの皆様による朝の読み聞かせ】た。大人が知らない間に変わったから、その鏡の子供も変わったのだろう。」と辛口のコメントを記されています。

子供であろうと大人であろうと「嘘」をつくということは悪いことです。しかし、子供の場合には、「嘘」をつくということは、成長していく過程において誰でも通る道であり、親から独立していこうとする段階でもあるといわれています。

子供はさまざまな体験をしながら成長していきます。「嘘」をついたり、人の心を傷つけたりもします。このような体験をくぐり抜け、そして、乗り越えた時「良心」が目覚めるのです。この「良心」を目覚めさせる力は、親や周りにいる大人の愛情なのです。

今まさに、この「良心」を子供たちの心にどのように育てていくのか、問われているのではないのでしょうか。